

会派視察における視察報告

平成28年4月28日

光市議会議長 中村 賢道 様

光市議会 森重 明美
(会派に属せず「為光会」に同行)

- 1 視察年月日 平成28年4月13日(水)から
平成28年4月14日(木)まで

- 2 視察先 : 広島市福山市鞆の浦
: 広島県尾道市百島

- 3 視察テーマ : 鞆の浦史跡巡りガイド・ボランティアによる(奥様ガイド)
の運営と活動。地方創生におけるシティーセールスの視点

: 離島廃校施設の利活用と島の再生を見る(アートベース百島)

- 4 視察所感は別紙のとおり

行政視察報告

会派視察：為光会に同行 森重明美

平成 28 年 4 月 13 日（水）～14 日（木）

4 月 13 日（水）

福山市「鞆の浦史跡めぐりガイド（奥様ガイド）の運営」について

【所感】

地方創生が叫ばれる中、地域の新たな発掘や観光戦略に力が注がれている。今回視察で訪問した鞆の浦は、かつて港町として栄え、数多くの歴史遺産や古い町並みを残す、人口 5000 人余りのまちである。

国の重要文化財をはじめ、江戸・明治期の町家 200 軒あまりが残り、町全体に歴史や文化、風土、生活の重厚さを漂わせている。多くの文化財と豊かな自然を抱える鞆は、昭和 9 年には、全国初の国立公園の 1 つに指定されている。このまちが発展を遂げてきた背景には、鞆が持つ「港町」という最大の特徴があり、日本で唯一と言われる天然の円形をなす鞆港には、江戸期に完成した「波止」・「雁木」・「常夜燈」・「船番所」・「焚場」といった設備のすべてが残り、かの坂本龍馬をはじめ歴史上重要な人物も数多く訪れ、歴史の舞台にもなっている。昔の町並を残したままの鞆の浦は日本で一番江戸時代の面影を残す地として味わい深い。

今から 30 年前、その地を訪れる観光客に、せめて道案内的な観光のお手伝いできたかと立ち上がったのが住民有志の「奥様ガイド」である。当時 5 人の主婦で始めたのだとお聞きした。当日のガイドさんは当初から携わっておられる方で、30 年以上のベテランガイドさん。観光客にお伝えしたいわが町の歴史や秘話など、実にわかりやすい庶民感覚での案内をされた。2 時間以内 2000 円の有料ガイドだが、団体でも個人でも対応。現在は 36 歳から 78 歳までの 17 名で構成されており、若いメンバーも育ちつつある。また小中学生もボランティアガイドの体験実施を行っていること、特に外国人の観光客も多いことから英語でのガイド説明もされている。地元ふるさとの歴史を学び伝え、おもてなしの心で接する観光客とのコミュニケーション能力を鍛えておられることは地域で育む教育力といえる。これも住民による自発的なボランティアガイドの素地があつてのことであり、このような住民力が地域の宝であり光市においても今後見習うべき視点である。今後の課題をお聞きしたが、やはりガイドとして常に研修し知識を深める事が大事であり、現地を訪れ自ら勉強をしたことは生きた言葉として伝えられるという言葉には、ボランティアとはいえ、立派なプロ意識が感じ取れた。特にボランティアに関して、料金設定は僅かなものであっても有償ボランティアの必要性を語られていた。その言葉は持続可能という意味からなかなか重い。光市の海商通りも地域おこしの一つのスポットである。

4月14日(木)

尾道市百島「アートベース百島」

【所感】

離島、百島は常石港からは、わずか10分弱で渡れる島であり、かつては400世帯2300人を超える人口を要した時期もあったが現在は500人程度の人口である。周りの島に囲まれさらに穏やかな百島は、島の好条件を生かした新たな再生が期待されつつある。島はとても美しく暮らしやすい生活環境が感じられた。少子化、人口減少のおりから、百島も幼稚園と小・中の一貫校施設が統合併設されたり、平成23年には5年ぶりの百島診療所がオープンしたり、この島は見る人から見れば、都会の複雑化した都市空間に比べて、いかにも自然の宝庫であり、人情味や時間の異空間であったのかもしれないが、アーティスト柳幸典と協同者たちによる創作活動をとおして、離島の創造的な再生を試みる施設アートセンターとして新たな存在価値を感じさせる。

12年間廃校となり眠っていた中学校を利活用し、現代アートの基地としての「アートベース百島」が2012年に発信された。

6人の若きメンバーが、この夢構想を支えている。

チーフマネージャーの大橋さんにお話しを伺ったが、中心者となるアーティスト柳幸典氏の人脈や協賛者の力とまた地域や行政・各省(文化庁)・離島振興の助成金などのマネジメントが大きなキーポイントとなることを指摘された。

何事においても、財政面の工面は重要だが、うまくセールスもされていると感じた。発信したアートのイベントでは、年1回の作品展開催経費として600万円から800万円の運営経費を要するという。(秋のイベントでは若者や外国人も多く、40日間約2000人が訪れた)

主な運営財源としては柳幸典氏の各所の柳スタジオの作品の売り上げ等が大きい。常設作品もかなり有名な作品が多く展示されており、この島は現代アート作家のための展示空間ともなりそうである。

廃校となった校舎の運用は、もともと教育委員会の持ち物であるものを、社協に貸し、社協から離島振興、地域おこしというような名目で無償貸与されているところも目を見張るところである。

島民の受け入れも歓迎の意を示している。季節の食材や保存食の提供が毎日届けられる実態に双方がうるおい島のよき関係性を生み出しており、この島には20代から30代の若者(5世帯15人)が移住してきている。まさに地方創生の移住対策のはしりでもある。

偶然にもアーティストの柳幸典氏本人が百島に在島で、さまざまな話ができるとはとてもラッキーかつ贅沢な視察であったといえる。光市の牛島も何かを見出して再生する術はないものだろうかと考えさせられた。

4月13日(水)

福山市「鞆の浦史跡めぐりガイド(奥様ガイド)の運営」視察状況



奥様ガイド30年、宮本さんのボランティアガイド案内実演。庶民感覚で歴史や秘話を独自の学びで紹介。



観光戦略に力が注がれる地方創生。おもてなしという観点から地域をあげてのガイドは今、小中学生にも波動。

4月14日(木)

尾道市百島「アートベース百島」の視察撮影



偶然にも百島に在島中のアーティスト柳幸典氏と意見交換。現代アートによる離島再生は既に若者移住者、5世帯15人の実績を生む。



人口減少により廃校となった中学校を利活用。現代アート作家のための作品展示空間となった。

中学校の体育館のスペースを活用して展示される柳氏の大型作品アートの一つ。40日間のアートイベントに若者や外国人約2000人が来島。

